

記録より  
見たる 刀劍鍛錬法の異同及其得失

(東京帝國大學工學部日本刀研究室報告第十四)

太田熊太郎

(一)

刀身の鍛錬に關する技術が刀劍製作技術中の最大眼目否寧ろ其全生命とも稱し得べきものであることは最早茲に贅するまでもないことである、今日猶眞摯なる刀劍研究家の寡なからぬのは、主として此點に無限の價値と興味とを認めて居るからであるといふても過言ではあるまい、實際古來行はれ來つた幾百の刀劍書は、要するに刀身上に見はれた諸現象を基礎として、刀劍そのもの、價値、眞價其の事柄を論じたに外ならぬのである。

然らば此千有餘年の永い歴史を有する刀身製作の變遷沿革が、いかにして行はれたか、而して其中何れの時代が最も多くの進歩發達を遂げたか、又其極盛期の製作の方法は果して如何なるものであつたか、是等は刀劍の根本的研究を志すものに取つて第一に知らんと欲する所の點であらう、ところで、其の刀劍製作の進歩發達の沿革如何、及び其極盛期を凡そ何時代と定むべきかといふに、前者に就いては記録の上からは殆んど絶望と認めるより外はないのである、又後者に就いても容易くこれに斷定を下すことは困難の事であつて、斯道専門の研究家の間にも種々異論のあることであらうと思はれる、しかし唯記録の上から、諸家の説を判斷して見ると、大體一條天皇の永延前後から鎌倉幕府の末伏見天皇の正應前後凡そ三百餘年間を以て最も精華を發揮した時代となすことに一致せるやうである、就中正宗、吉光等の輩出したといふ鎌倉幕府の末期は、蓋し最極盛期であつて、其前後には名工

34  
が雲の如くに群り起つたのであつた、右の永延前後から正應前後に至る時代は、一面我國に於いて、武人の最も活動した時期で、純武人的精神が天下を風靡した際であるから、刀劍製作なども、直接其影響を蒙つて、所謂神品と稱せらるゝやうな名作が現はるゝに至つたので、誠に偶然の結果ではなからうと考へられるのである、後世徳川の中期以後諸種の學問文藝の發達に伴つて、刀劍研究の風も盛んとなり、鑑刀家、刀匠は勿論、其の他斯道に志の深い諸藩の士で、實地刀劍製作を試みるものも寡なからぬやうであつた、是等の人々が良刀を作出せん爲めに、期せずして、其方法を上記の時代に屬する、古名工の鍛法に求めんとするに至つたことは、一面上記の時代に於ける刀劍製作の最も進歩發達せることを立證せるものと見做し得るのである、元來古刀が新刀に比し其製作遙かに精巧なものであつたと認むることは何人も異論のないことで、殆んど定説と見るべきものである、而して、徳川時代の中期以後に於て、復古鍛法を標榜する鍛冶家乃至篤志の士の多かつたことは、自分等の蒐集し得た鍛法書の殆んど全部(數に於いてこそ僅少であるが)之れを標榜して居る點より見て容易に推斷しうることにやうに思はれる、これは、其當時我國の國學者等の間に盛んに復古的思想が鼓吹せられそれが可成り其頃の思想界を風靡したのであるから、或は其の影響が亦刀劍界にも及んで、刀匠等が大した自信があるのではなく、稍雷同的の意味に於いて、これを唱道したものであるかも知れぬ、しかし、實際古刀が世人の尊重を受くる價值のあつたものであることは否むことは能きないので、刀劍研究の漸く進歩するに従ひ、彼等の鼓吹する復古鍛法といふことは、早晩實現さるゝ性質を有して居つたのであらう、して見れば、當時思想界に瀰漫して居つた復古的精神は、單に刀劍界に於ける復古鍛法の機運を助長促成したに過ぎぬものであると謂ひ得るのである。

斯かる次第で、當時の刀匠等が競つて古刀の鍛法を會得せんと、種々苦心を廻らしたのであらうといふことは、想像に難からぬことである、彼等が若し何等か古傳書類の斷片でも手に入るゝことがあ

つたとすれば、それが果して眞の古傳書であるか、たとへ又それが確實なることを認めらるゝにしても、果してそれが古法の全部であるや否やなど、深く其性質を究むることもせずして、これを以て六韜三略視し、己れ獨り古法の奥秘を極めたやうに合點して居つたものも、尠なからぬやうであつたのであるから、復古を唱道する各人の説が何れも區々たるものであつて、容易に各説の一致點を見出すことが能きぬのである。甚しきは甲乙全く正反對の説を以て互ひに復古を標榜するの矛盾をも生じてくる有様なのである。かゝる事情であるから、彼等が復古と稱し、鼓吹標榜するところのものが果して幾何の程度まで信用し得べきものであるかは、大いに考究を要する點である。若しこゝに古名工の純粹にして且つ完全なる傳書でも有して居つたならば、此問題の解決も容易であらうけれども、遺憾乍ら未だ斯かるものを手に入ることが出来ぬ、恐らく將來とてもこれを獲ることは絶望であらう、これは前回の報告報告第八中にも述べて置いたことであるが、今日現存する數百の刀劔書なるものが、殆んど全部徳川時代に出来たもので、而かも其中鑑定書又は鍛冶の系圖傳記類が其大部分を占めて居り、製作上の問題に觸れて居るものは僅かに數部を擧げ得るに過ぎぬ次第であるのみならず、此當時の刀劔書の中には自家廣告賣名の爲めに事實を誇張し、曲筆してまで自己の主張を擴めんとするところに徹底的努力を行へるものあるやに窺はるのである。當時かゝる手段を弄する鑑刀家、刀匠家も尠からざりしと見え、其當時既にこれを攻撃し警告を加へる人も現はれたのである。

元來古傳の鍛法などは、書傳によること皆無で、多くは口傳によつて傳へられたもので、戦國のやうな幾多の戦亂の後を承けた徳川時代に至つては、其所傳などが失はるゝのは當然であらう、たとへ、戦國時代のやうな社會上の大變亂がなかつたにしても、永い年月の経過の間には、時代の推移に伴ふ所の思想の變化や、社會生活の複雑さを加ふるなどによつて、刀劔に對する國民の精神が根本的に變化を生じて來ることであらうから、いつまでも古名工の刀劔鍛鍊に對する信仰や努力を後世の鍛

冶に期待することは殆んど不可能である。是等は明かに古傳鍛法の忘失せられた有力な源因に相違なからう、偶々古傳の方法なるものが實際に誤りないとしても、精神の亡びてしまつた、單に古傳の形骸に過ぎぬものであつたならば、吾々は又之れを眞實の古傳として承認出來ぬわけである。

右に述ぶるやうな事情で、吾人が記録の上から優秀なる古傳の鍛錬法の幾分についても會得せんと欲することは頗る至難の事である。しかし、徒らに疑懼することは何等の結果を齎すわけでもない。實際彼等が眞面目に唱道して居る點には、何等か根據のあることであらうといふことを認めざるを得ないのである。仍て是より不完全乍ら近代刀匠等の所謂復古鍛法の傳書なるものを透して古傳鍛錬法の片鱗なりとも窺はうと思ふのである。此の古傳鍛法を知るといふことは、前に述べた所の理由によつて、畢竟刀劍鍛錬の極致を知る所以の道であると信ずるのである。

但し茲に一言辯じて置きたいことは、是から自分の述べんとする鍛錬といふ詞の意味である。鍛錬といふ言葉は今日では可成り漠然たる意味を有つて居つて、廣義にも狹義にも説き得るのである。廣い意味に於ける鍛錬といふ言葉の中には水心子の劍工秘傳志に謂ふ所の造法に屬する事、燒刃に關する事、其他細目に亘つた事柄が寡なからぬことである。しかし、今こゝに論じやうと思ふのは、極めて根本的意味の鍛錬の事であつて、細密に亘る問題には及ぼさぬつもりであるから、動ともすれば、鍛冶の刀劍鍛錬に對する精神とか、心得とかいふやうな、抽象的意味に傾く嫌がないでもない。刀劍鍛錬のことを論ずるに當つて聊か物足らぬやうにも感ぜらるゝのであるが、しかし、深く考へると、元來日本刀製作の如きは精神的要素の最も濃厚のものであつて、これが又日本刀の唯一の特徴であるやうに認めらるゝ、俗に所謂精神を罩むるといふことをいふが、此精神を罩むると否とによつて結果に非常の逕庭を生ずるのである。いかに手段方法が具備して居つても、此根本的條件が基礎となつて居らぬものであつたならば、それは要するに空論に過ぎぬので、所詮砂上の樓閣たるを免れぬのである。

以下述ぶる所の鍛錬の説が兎角抽象的に傾くやうに思はれるのも寧ろ當然の結果であると信ずる。

(二)

前回の報告に於いて刀劔書の重なるもの、解題的記事を掲げ、其中鍛錬に關するものとして、劔工秘傳志、刀劔實用論、刀劔實用論後篇、刀劔辨疑、刀劔秘寶、刀劔得失考、新刀辨疑、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、刀劔或問、鐵山秘書等を擧げて其内容に就いても概略論じて置いたつもりである。さて、其後資料の蒐集によりて、新に鍛錬に關する二三の書物を得たる中に、刀劔固癖録といふのがある、これは芝區高輪岩崎家の靜嘉堂文庫の所藏本で、此書と前記水心子正秀の數著とを比較すると、其意見は全く正反對のことを述べて居つて、研究上興味尠なからぬやうに覺ゆるのである、而かも、水心子の標榜するところも、刀劔固癖録の著者の標榜するところも、復古の二字にあることは、大いに注意すべきことであらうと思ふ、仍て是より主として此の正反對の意見を藏する二者の説を中心とし、其他のものはこれが参考として、鍛錬に關する説を陳述して見やうと思ふ、しかし、本題に入る前に一應固癖録なる書物に就いて紹介する必要があるであらうと思はれる。

刀劔固癖録は其序文(此序文は豊後臼杵藩士橋本衛橋信次の誌せるところのもので、信次は國癖録の著者忠棟の門に入つて刀劔に關することを學んだ人である)に依ると同じく豊後臼杵藩士橋本彌門太源忠棟號を溫知といつた人の著はす所のものである。

忠棟は性質奇行に富み、物理に精通し、學ばずして諸々の技藝に熟達して居つたと稱せられた程で、擊劔圍碁、庭作りの類の事まで能くせざる所のものがかつたといふ、殊に相劔の道に至つては其堂奥を極めて居り、又自ら研磨の術をも行つたといふことである。

忠棟は幼時から伊吹半七和堅なる者に學んで斯道に志したが、和堅は彼の熱誠にして志の厚いのに感じ教導すること多年、遂に刀劔の秘業歴世の古辭等を悉く彼れに授けることゝなつた、時に和堅

は齡八十餘、致仕して家に在つたが、間もなく此世を去つたといふ、忠棟は和堅の歿後愈志を堅くし、其遺志を奉じて、研究を怠らなかつた爲、新古の増減、盛衰の道理、符節を合はす如く釋然たるものがあつたといふ。

和堅も亦幼時から刀劍を好んだ人で、稍壯年の頃に及んでは大概刀劍の善惡邪正を辨別することが出来、次第に其利用を究むるやうになつたが、尙其根元を探つて見たいといふ希望を起して、江戸勤番の際、公務の餘暇に、公儀御指料方黒田與三右衛門義親といふ人の門に入つて學ぶこととなつた、此の義親といふ人は當時劍の道に於いては博覽にして古今に通ぜざるところがなかつたと稱せられた人であつたので、和堅はこれに従つて學ぶこと多年、遂に衆に超えて悉く奥旨を授かつたものであるといふ。

忠棟の刀劍鍛錬に關する智識は以上の人々に胚胎するのであるが、さて其意見によると、古刀の上作は純鋼鐵で作られ、鍛錬は五六十遍以上に及び、其巧拙によつて、上中下の位を生ずることはあるけれども、大抵折れず曲らざるの域に達したものであるといふ、斯様な確信を得たので、彼れは奮然古刀鍛錬を復活しやうといふ志を立つるに至つたのである、そこで劍匠をして、試みに其方針に基いて鍛錬せしめて見やうと思ひ、鍛錬の業に従事して居る人毎に其理を説いて慫慂するところあつたが、これに服するものがなかつた、時に農具鍛冶に嘉四郎といふものがあつて彼の説に服し、其指導を仰いで刀劍を作ることを承諾したので、忠棟は早速彼れをして一短刀を作り試みさせたところが、幸にして古刀の地鐵を成すに至つた、茲に於いて彼れが平素憧憬して居つた、粟田口久國の風を模して太刀及短刀を作り、官暇の餘技稽古神流と銘打つて、浪花に送り更に又京都に送つた、然る所京師の評では粟田口國綱といひ浪花では粟田口物との評であつたので、忠棟は我意を得たことを喜んで嘉四郎に一任して一二刀を作らしむることゝなつた、其結果は忠棟指揮の時の作には劣るけれども略々古刀の

體を得るに至つたといふ然るに、其後更に數刀を鍛ふるに至つたが、次第に鍛數を減じた爲其出來漸次劣惡を加ふるやうになつた、忠棟は深くこれを責めて嚴しく教導したけれども、面從して容易に改むるに至らなかつた、故に爾後の作は大底藤原高田物のやうな出來口のものになつてしまつたといふ、鍛冶の嘉四郎が鍛數を減ずるに至つた理由は、忠棟の方針によると、第一に非常な勞力を要すること、第二には地鐵の減少が甚しいので是等の點を厭ふからであつた、忠棟は野匠の共に謀るに足らぬことを慨歎し、今度は自身鍛鍊を行ふの決心をなし、家の重器を賣つて鋼鐵を求め、土藏を壞つて鍛冶場を造りなどしたので、彼の友人等も其志に同情して種々助力を與へた、忠棟は是によつて大いに力を得、高田の劍匠久吉ヒサキマといふものを雇ひ向槌とし又相劍門人中の幸嘉助吉定といふ者をして久吉を助けさせ、備前風に倣つて一刀を作り東都に送つた所、備前長光一文字との評であつたといふ、又久留米藩士某は千代鶴といふ評を下した、忠棟は之れを聞いて大いに感じ、其人に遇つて是非を論じたいと思つたけれども、東西遠隔如何ともすることができず、仍つて又一刀を作つて其士に寄贈しやうと思ひ、相州に倣つて鍛鍊に着手した所、其功未だ半にも及ばぬ中に、高田の劍匠久吉も亦鍛鍊の數多きに倦んで暇を取つてしまつたので、止むなく其業を中止することになつた、兎角して數ヶ月を經過する中、忠棟も亦中風を發して手足の自由を失ふの事件が出來した、かゝる次第で忠棟復古鍛鍊の道も將に絶えんとする有様になつた、此時に忠棟の門人で此固癖録の序文を誌した信次が、これを憂ひて久吉の助手となつた吉定に其業を授くることを勧めたが、忠棟は容易に肯んじなかつたのである、ところが適々又こゝに、肥後の郷士峯彦四郎泰晴といふ人があつて、此人が泰祐八清重清重は白杵の人であるといふなる者と共に、彼の鍛鍊の法を學びたいといふことを定吉を介して忠棟に懇請した、信次も亦傍から之れを慫慂したので、忠棟も遂に許諾することゝなつて秘事を悉く吉定に授けた、後又泰晴、清重の二人にも口授したといふことである、これは此二人に口授する以前、吉定、泰晴、清重の三人

40 で一短刀を作つて古刀の地鐵を成すに至つたからである。

其後官では、吉定に費用を給して、俸祿の者を向樋とし、安政四年春から六年の秋にかけて、數刀を作つた、其中疵が出て實用に供し難いものを以て、竹木を切り、又鍛鐵を切り試みた所、七八厘も切込んて刃が少しも缺けたり、コボレたりしなかつた、又柱の貫穴に右の刀を差入れ、表裏から押折らうとしたけれども折れなかつた、其他種々の試験をして見たが別に故障を起さなかつたといふ、斯様な理由で彼れは、世に純鋼鐵でもつて作つた刀は折れ易いといふのは、全く鍛鍊の不足の結果であると稱して居る。

則ち此書は、忠棟が、和堅から授かつた方法及び諸書から得たところの智識に更に自己の意見を加へて所謂復古の鍛鍊法を叙述したものであるといふのである、序文の最後に次のやうな辯明的の文句が記してある、忠棟が復古鍛鍊法の中絶せんとした際、纔かに吉定が其業を繼承することができた爲めに、其患は免れたのであるが、しかし、忠棟の病耄のために吉定作刀の是非を判別して貰うことが不可能であつたので、此書も忠棟の未定稿のまま、是正するの機會がなかつたといふ、かゝる次第で、此書の中には事實の重複、誤脱、或は字句の不完全の點あるのを免れぬ、例へば鍛冶の大意を記してある條に、白龍子の序を多く轉載して自論と混同識別し難い所などがあるのが其一例である、しかし、今妄りに之れを改むれば、原著者の意を失ふ懼れもあれば、草稿の儘で傳ふるのであるといふ、右の辯解を讀んで見ると、本書は必ずしも忠棟一人の手に成つたものではなくて、序文を誌した信次の補筆した點も多少はあるものゝ如くに推察せらるゝ、以上は大體本書の序文の大要であるが、之れに依つて本書の成つた來歴や目的について著者の意の有る所を略々看取し得ることゝ信ずる、勿論此序文だけでも仔細に觀察すると、多少矛盾した點、曖昧な點、又は常套的の誇張手段など見えるので、疑惑の念も多少起らぬでもないが、多少の疑點の爲めに本書の全體を疑ふほどの必要も認められぬので、大體に

於いて眞面目な傳書として、推奨しても差支なからうと信ぜらるゝのである。

(三)

日本刀が長い年代の間に、其製作上に幾多の變遷沿革のあつたであらうといふことは、何人も想像するところであるけれども、今日これを詳にし得ざるものであることは、前條にも述ぶる如くである併し慶長前後、換言すれば所謂新刀と古刀の岐れる時代に、日本刀の製作上に大なる變化があつたものであることは諸書齊しく唱導するところであつて、此の點は確かに事實として承認し得るやうである、此事も前回の報告第八中に一言論じて置いた、さて、水心子は新刀の古刀に及ばざる理由といふのは歸するところ、古刀は卸鐵の法により新刀は然らざるが故であると、主張して居るのである、劔工秘傳志卷上に、

出羽千草今有る風の鋼は、天文の頃より仕出したるものにて、其以前にはなき事也、故に應永の比迄の鍛冶は自ら銚を吹をろして鋼とし、能くをりたる時は其儘打延て刀劔に造る、是所謂鑄刀也、又鋼の出來思はしからざるときは二三遍も鍛ひて造りたるもあり、今世の如く數遍鍛ひたるには非ず、多くとも七つ八つ折を限りとせしと也、然るにおろし加減に依りては剛柔出來不出來悉く有て、程能き處に其得難き事故に、其比よりは自然と出羽千草の鋼の數遍鍛ひて造りたる事多し、是を以てをろし鐵の傳終に絶へたり、去れども、應永の比迄は、關の兼元、長船、康光、盛光等の作には、をろし鋼にて數遍鍛ひたると鍛ひざると、一人の作に、兩様有ると有れども、其後の作に、至つては稀なる事にて、慶長以來の作などには猶ほ以稀なり、最も、適々、をろし鐵と云事は有れども、古の如く唯其儘打延て造る事を失ひ、今風の出羽千草を用ゆる如く、數遍鍛ひて造る事に心得たる故に、古傳は絶えたり、是を以て慶長以來の作を新刀と號す、古風の鐵性にあらざる故也、中にも洛陽國廣肥前忠吉などは最早二百年に及ぶ、新刀といふべきに非ず、今の世の作に同じ鐵性なるは、是皆鋼に依る所なり、今世

も往古の如くをろして造る時は則ち古刀の如くなり云々

同じく水心子著の「刀劍辨疑」下の卷に古今鍛冶の製法の正反對なること述べたる一節あり。古の鍛冶の仕方と後世の鍛冶の仕方とは大に異なる、故に其耻づる處も表裏也、凡近代の鍛冶は鍛へて造る事に於てはその委き事古に耻ざる者あり、然れども鋼を製する事は古に不及、此故に數遍鍛へて鐵を精美にするを專とすれども、鍛數多き程鐵性弱くなりて下手の業には成り難し、依て下手は自ら鍛數少く、上手は思ふ儘に數を疊みて鍛ふる故に、鍛數少きを耻とする也、扱古への鍛冶の數遍鍛へて造るを耻たりといふは、鍛へずして能程に鋼を製する事を專とすれども、其業下手にては成り難きによりて、下手は自ら鍛へて造る故に是を耻たるなり、尤古作といへども鍛へずして造りたるは誠に稀なる者也、右數遍鍛へて鐵の弱らざる事、弱る譯、鍛へずして造りたる物の勝る事、悉く傳書鍛鍊の條に記す。

右にいふ、水心子が傳言といふのは、蓋し「劔工秘傳志」を指せるものに相違ない、而して、同書中の鍛鍊の條によつて彼の所謂數遍鍛へて鐵の弱る譯及び鍛へずして造つたものゝ勝れる理由なるものを忖度すると、鍛へて造るものは折返へす度毎に合口の中へ泥槽が流れ入つて、自然鐵が弱くなるのであるといふに歸着するやうである、則ち刃鐵を鍛へ殺すといふのは、合口の中へ泥槽が流れ入つて、鐵が自然に弱つてしまうことをいふのであると稱して居る。

右の水心子の説と略ぼ同一の意見を有つて居るのは、肥後熊本藩士の松村英記昌直である、其著「刀劔或問」下卷に、

萬治寛文に至つて助廣直改が如き良工並興つて刀劔を造る、大治の助なくして古法によること能はず、四方白の精密ならず、柔ならざる鐵性に随つて、數十鍛して鐵を精美にする造法を工夫して、其世に冠たる良刀を造る、精鍊の法（所謂卸鐵の法）を指すなり、廢絶して精鍛の法與る、然而以來天

人悉く以爲く、古刀の良なるや、皆數十鍛して、然らしむと、大治の助と古法のあることを知らず、數鍛の法日に進む、(中略)近世鐵山彌衰へ、大治彌其法を失ふ、汲々として利に走り、砂を吹くこと彌粗なり、鐵益々剛く益荒し、殆ど銚の如くにして、大治却つて刀冶を害す、然ども刀冶筋を勞し骨を苦しめ、屹々として數十鍛して大治の害を補ふて良刀を造る、力を勞すること助廣眞改に倍するものは工の拙きにあらず、大治の害甚しければなり、(中略)數十鍛して上作を模造するの巧術、往古より以來當時より盡せるはなし、然れども古刀の鐵性に齊しからずして、新刀たることを免れざるは何ぞや、大治助けず、造法殊ればなり、近頃水心子之を憂へて相州鋼廣が門人となり、絶たるを鑽き廢たるを興し、大治の助を待たず、再五郎氏の法を明にして、これを天下に傳ふ、余も亦頗る其法を得たり云々。

又同書下卷他の條下に、

上古の上作は鍛たるは稀なり、正宗は一二遍若くは三四遍の鍛多し、上古の上作に數遍鍛たるは至つて稀なり、(中略)

天國、吉光、古備前等を見るに、希に一毫の肌なく一枚かねにして、至つて精美にして玉を延べたる如き物あるは、右にいふところの金を以て一遍も鍛はずして作りたるなり、又古への上作良工と稱する刀冶は、鐵性天國吉光寺等に劣らずといふとも、かねを金玉の如く鎔事能はず、大略三四遍の鍛あり、故に一枚かねは稀にして鍛目あらわれて却て見事なり、後世地肌と稱する文章是なり云々。

以上は、水心子及び水心子一派の人と見るべき、杉村英記の説を掲げたのであるが、英記は前に述べた如く、肥後熊本侯の藩士で、非常に刀劍鍛鍊の事を好んだ人である、嘗て江戸に出て鎌田魚妙に師事して専ら鑑刀の事を修業し、又斯道研究上の關係から、水心子と餘程親交があつたやうである、彼れの刀劍に關する説は、必ずしも、水心子にのみ追從して居つたわけでもないが、鍛鍊に關する意見は全然水心子の説を服膺して居つたやうである、さて是等以外に水心子と同一意見を有つて、而かも、其説を

44 堂々發表した人は、今日記録上には見當らぬやうである、仍て、是から、刀劔固癖録の説を次ぎに紹介することにしよう。

## (四)

水心子は、慶長以來の新刀が、古刀に及ばぬのは、所謂新刀は、古への卸鐵の法に據らず、専ら鍛鍊のみを事とせるが、爲めであると、主張して居ることは、今述べた通りである、然るに「刀劔固癖録」の著者が、之れと全く正反對の説を立て、居ることは、前きに掲げた固癖録の序文の中に、古刀の上作は純鋼鐵で作られ、鍛鍊五六十遍以上に及んで居る、其巧拙によつては、其出來に上中下の位を生ずるものであるが、大體折れず曲らざるの域に達したものであると、説明して居るのによつても、略ぼ推察し得ることであらう、而して慶長以來の新刀鍛冶の製作に關しては、次のやうな意見を述べて居る。

慶長以來新刀の輩、鍛鍊の員數を減略して、新に碎鑠(淬鑠?)の兩法を作意して、専ら地鐵細密にして古劍に等しからんことを思ふなり、最も思は撰ばずんばあるべからず云々。

又當時の多くの艦刀家、刀匠等が、刀劔鍛鍊の根本的精神を没却して、徒らに新説に迷へる態度を嫌らず思へる様子は、其言葉の中に明に窺はるゝのである。

近世の鍛冶己れが器用才覺を恃んで、人に教へを受くることを嫌ふ、元來師は古人の教に導き入れ、必奇癖に陥らざるやうに掌を指を悟す者なり、殊に鍛鍊といふことは、萬能百術何れの修行にても、上達して至るを鍛鍊といふ、至らざるを不鍛鍊といふ、これ小童も知る所なり、而るを況んや鍛冶に於いてをや、文字(以下二三文字不明、恐らく誤説にてもあらんか)に有事を覺悟せず、恣に員數を減じて奇説に傾、頻に文彩を好んで、本旨を失ふ、此亦不思のあやまりなり云々。

更に進んで、は爍鐵(水心子の所謂卸鐵の意)の起源を論じ、且つ該法は古法の眞術なるものではないと稱して居る。

既に前に出す如く、慶長以來の作者、鍛錬の員數を減略して、新に作意を加へて流れ來り、其後寛文の頃大阪の輩疑の心起つて、勿論國廣、忠吉等の作方にて、中々古劍に比し難きことを辨へ、また、作意し、爍し鐵の法始まる、此に依て、世上の鍛冶大半此法に従ひ、暫時の靈名ありと雖も、不久して忽止む、眞術に非るが故なり、然らずば、古に叛いて新法少く、是非ありと雖も、此亦五十歩を以て百歩を笑ふに類せんか、世人是非を判ずるもの亦皆根本を失つて其末を論ずるのみ、故に枝葉繁多にして混雜に及びべり云々。

固癖録の他の條を見ると、爍鐵則ち卸鐵に就いて更に繰り返へし論じて居るところがある、聊か重複の嫌はあるが次に是を抄出しよう。

洛陽一條堀川の住國廣、肥前の國の住忠吉が類ひ、鍛を十五遍と改め直し、此を以て武用に備ふるに足れりとす、又は東武の繁慶、虎徹が輩、眞十五枚甲伏と彫る此皆十五遍の鍛なり、其後寛文の頃大阪の住人津田助廣、井上眞改等も、暫は大阪正宗と云て流行せり、出來模様、大亂刃にして、沸粗し、地鐵細に見えて、春の霞ある空に似たり、此則ヲロシ鐵の元祖ならむ、最も爍鐵といふは、數遍鍛へば勢氣を失ふ、然らば亦七八遍の鍛も爍に始まるか、何となれば、助廣眞改等總べて大阪の作共は、地鐵至極細やかに見ゆれども、沸の意、金粕を散らしたる如く平めに見えて、大小共に勞れたり。

沸と云は、地鐵の精粗、勢力の強弱、自然に顯るゝ氣なり、是故に善惡を云ふなり、少しは燒揚の加減によれども、鍛精かなるときは沸も亦細かなり、鍛粗きときは沸も亦あらし、古刀は總べて新刀より沸精かなり、最上古の作と云は沸清極々細かにして眞白なり、依之刃縁尋常なり、(中略)又右の爍鐵の事は、鋼鐵を爍して砂石を去り、鐵の細かならんことを欲するなり、譬へば壁を塗るものゝ、壁土を水に立て、砂石を去つて土を細にするのみならず、水に立て、勢氣を落し、壁を塗つて干し割れざる法なり、故に萬事を一概に取つて用ゆるときは、其失少なからず、鋼又は鐵の替りに、古鐵を爍して用る法

は、燦して強き所を取る、鍛惡しければ、ナマ鐵となる、又鋼鐵のことは此に反す、燦して勢氣を落すなり、總て燦鐵、碎鐵共に近世の法にして専ら手間を厭ひたる工夫なり。

卸鐵の法と、數鍛法との得失如何に就いては、後に述ぶることゝする、さて、右の文中に於いて、固癖録の著者は、刀身上の沸の精粗、強弱、換言すれば沸の善惡は、多少は、焼揚の加減によつて影響を受くるけれども、主として、鍛鍊の如何に依るものであるといふ、即ち鍛が精かれば沸も亦細く、鍛が粗であれば沸も亦荒くなるといふ、而して古刀は概して新刀より沸が精かなのは、右の理由に由るのであるといふ、銚勾が主として鍛鍊の如何によつて顯はるゝものであるといふことを唱ふるのは、固癖録ばかりではない、新刀問答上卷に、銚勾は劍の勢ひ、別て勾は自然と顯はるゝもの故に鍛の善惡に依るものなり、依て劍の魂ともいふべきものか云々と稱して居るが此説は明かに固癖録の著者と此點に關しては同一意見であることを知り得るであらう、猶これと同一意見を有するのは、刀劍五行論の著者の南海太郎朝尊である、其説を次ぎに述べやう。

俗説に火を高く焼けば銚に成り卑く焼けば勾に成るといふ事あり、是は大いに相違なり、銚勾は鍛に有り、銚勾は火を卑く焼いても地鐵さつくりとして梨目の如くに、鍛(?)地銚は鍛るに依て出るなり、火卑くしても地は皆銚に見ゆるなり、勾鍛に無理に火を高くかけても、地銚はなし、又ふちもむらになり、角銚に成り、銚有所もあり、無き所もあり、銚角立て、喰付たる、是をなま銚と云なり云々。

刀劍の銚勾が鍛鍊によつて顯はるゝものであるといふ説は右に述ぶる通りである、刀劍五行論の著者が、固癖録の著者と、期せずして、意見を一にして居り、而かも銚勾と鍛鍊との密接の關係を論ずること極めて徹底的であるのは、大いに注目すべきことであらうと考へられる、猶固癖録の著者は銚勾に限らず、一般に刀劍の肌模様が鍛鍊の如何によつて變化あるものであることを唱道して居る、刀劍の肌模様は鍛鍊の完全なる結果、必然的に生ずるのであつて、鍛鍊不充分にして現はるゝ文彩は久し

からずして、消滅し去るものであるといふ。

上古より以來鍛錬の業大概其國風を顯はす、剽模様、地肌の意味、沸匂に至るまで相州は其土の風を顯はし、備前は其土の風をあらはす、(中略)備前の地肌に相州の焼刃を渡すとも紛るべからず、來に丁字あり、一文字に丁字あり、土取の模様多分同意、然れども京の亂に沸多く、備前ものは匂勝なり、此を以て觀るときは、剽の燥潤、業の甲乙、地刃沸匂に至るまで、何も鍛錬の意に因て文彩模様更ること彰然たり、故に意味微妙を捨て、専ら利用を可思なり、業至るときは自ら文あるべし、正宗が秘事三代に過ぎず、正廣に至て大いに衰ふ、傳の不傳事可見のみ、(中略)假令正宗が秘事、累代にして不朽、糟糠一函の中に留り、尊信して子孫に傳ふとも、其人に非らずして何の益かあらん云々。

右の文中にも見ゆる如く、固癖録の著者忠棟は、鍛治家や鑑刀家などが兎角信じて有難がるころの、秘事とか極意とかいふものを餘り重要視して居らない、刀匠の最も意を用ゆべきことは、要するに、修行を積み鍛錬の辛苦を重ねることである、精神を凝らして業を學べば、秘傳も奥義も自然に會得し得るものであるといふ、猶次のやうな信仰的な意見を他の條に於いて洩らして居る。

諺に秘事は睫と云ふことあれば、必ず奥を尋ねべからず、即ち手に持ちたる鎚の當りに有事を考へ知るべし、云々、元來焼揚前後の動靜、水火の過不及、全體相應の加減に於ては、修行鍛錬の上にて、假初めの事にあらず、眞に以心傳心の妙處にして、傳とするとも不可及、習と爲るとも不可及、尤前に出ず如く、全く外より求むるに非ず、残らず己にあることなり云々。

忠棟の主義は歸するところ鍛錬にあるので、これを根本の基礎としない刀劍製作は、要するに邪道に陥つて居るものであつて、古刀の製作法ではないといふのである。

黒田與三右衛門義親は、忠棟の師伊吹半七和堅の其又師匠であるが、その義親が和堅に傳ふるところといふ秘事に、

上古は鍛鍊六十四遍位を通例とし中古應永頃に至つて減じて三十二遍を通例とするやうになり、更に降つて慶長年中の新刀に至つては略して十五遍となり、近世に於いては愈々勞力を省くが爲めに、七八遍を通例とするやうになつたのであるといふ、忠棟は此の義親の説に註釋を加へて、六十四といふのは八八六十四で員數の極をいつたものに過ぎぬので、通例は鍛鍊の加減によつて七十位のものもあり、或は又百鍊のものもある、上古のものに至ると三百に餘るものさへあつて、一概には決定し難いものである、中古應永頃數を減じて三十二遍と稱するのも、前後の作によつて精粗の差あること當然である、又末のもの、邊境の作に至つては追々減少して多分二十遍位を通例とするやうになつた、しかし鍛の方法は同意であつて、新刀とは格別の相違がある、新刀に至つては鍛數を十五遍を改め、更に七八遍に減じたるに至ては、全く論外であると唱へて居る。

彼れは又水田大與五國重の作を評して、出來の模様大亂で沸が粗いけれども、正鐵を用ゆるから地刃共に勢氣盛んで、沸粒立ち、烈しい出來が多い、しかし、惜しい哉、鍛數は何れも十五遍以下である、此の鍛冶が上古の如く、鐵の加減を知つて、鍛の員數を益したならば必上手となるであらうと、又白龍子が此の大與五國重を至極の上作なりと賞め、唯水田の類は、一體に鋼鐵を以て鍛ふるから折易いといふ批難に對して、固癖録の著者は鋼鐵を以て鍛ふるが故に折れ易いといふ説は、甚だ承認し難いことである、上古より鋼鐵を以て鍛へぬ刀劍は絶無である、中古白鐵(白鐵とは如何なる鐵を稱するのであるか今詳にし難いけれども、古今鍛冶備考卷一、鐵山路辨の中に記載してある、四方白、八方白と稱する鋼を指せるものであらうか、如く疑問として掲げて置く)を以て直鐵(直鐵の意味亦不明)とすること創められた、又地鐵にナマガネを雜ゆることは近世の方法であつて、鎌庖丁等の割刃鐵と異ならぬ性質のものである、猶近世の方法として鋼鐵を燦して用ひたり、或はナマガネ、鍋鐵等を以て種々工夫を凝らし、或は剛柔の鐵を取合せて種々の肌模様を出す事に腐心して居るのは、其目的全く古刀に似通はせん

爲であつて、而かも、其模様を作る呼吸加減などを以て、鍛錬の秘傳極意などと稱するものゝあるのは、全く奸僞の沙汰である、と批難して居る、則ち純鋼鐵を折り鍛へて作ることが上古の鍛法であり、且つ是こそ眞の鍛法であるといふのである。

是等の點に於いて、固癖録の著者忠棟は全く水心子と反對である、尙、水心子等は鋼鐵鍛、黄金鍛の可能を認めて居るが、忠棟は、之れを認めざるのみならず、かゝる説は、世を欺く空言なりと稱して排斥して居る。

刀劍の疵の如きものも、元來鍛錬の際、折返へしの不充分から生ずるものであつて、古書に、古刀の疵は深く意に介せずして、新刀の疵を痛く恐るゝ所以は、古刀は鍛の遍數多い故に隨つて疵も多いが、併し新刀のやうな刃切れ、月の輪など名づくる大疵の出ることは殆んど稀であるからである、即ち古刀は鍛錬の數多く且行届いて居るが故に外ならぬのであると稱して居る。

斯くの如く、近世に至つては、全く根本の古法が世人の腦裏を離れてしまつて居るので、相劍を始め鍛錬の是非得失を論ずるものも、惣べて近世の方法を基礎として居るので、議論は多岐多端に亘つて歸着するところを失ひ、其結果は愈々奇僻を極むるに至るのであるから、相劍書なども不完全のものが大多數を占めて居るといふ。

忠棟は、斯かる根本的の缺陷を救はうといふ考へで、自分が師匠から傳授した、刀劍鍛錬の趣意を、刀匠等に談じたところ、彼等は鍛錬の事は十五遍を以て通則とする近世の方法先入主となつて、これが腦裏に深く印象せられて居るから、之れ以上に鍛錬の數を加ふる方法は、單に鐵を勞らすに過ぎぬものである、況んや數十遍などといふことは、全然鍛錬の意味を知らざるものゝ説であるといつて、忠棟の説に耳を傾けるものが稀れであると慨歎して居る。

要するに、忠棟の意見は、其手段方法に、深い秘事を藏する底のものではなく、切磋琢磨全精力を傾注

50 して、鍛鍊を施すことが主眼であつて、此努力をなす間に、自然妙處奥義をも自得するに至るのである。此信仰的精神を缺いては、百の手段方法も、畢竟空論に等しきものであるといふのに、逢着するのである。

## (五)

以上に於いて、大體刀劍鍛鍊に關する、水心子及び刀劍固癖録の說を詳述したつもりである、さて、兩者の說の異同及び其得失如何を考へて見ると、此二者の意見は殆んど事毎に反對の方向に進んで居ると認めて差支ない、こゝに一應附言して置きたいことは、水心子正秀と固癖録の著者橋本彌門太忠棟なる人とは、社交上にも、刀劍研究上にも、直接交渉はなかつたやうである、唯忠棟は江戸に水心子といふ刀匠が居つて、卸鐵の法を以て相當に名を得て居つたといふことを知れる位の程度に於いて、其存在を認めて居つたに過ぎぬ、其事は固癖録の中に一寸見えて居る、斯様な次第であるから、兩者の意見の相違は、故意に出でたものでなく、全く偶然の結果であるとは、勿論疑のない事であらうと思ふ。

右に述ぶる通り、兩者の說は、第一に卸鐵使用の可否、及びこれに關聯する鍛鍊の際の折返へしの數の點に於いて、又黄金鍛、鋼鐵鍛の能否、或は鍋鐵、ナマ鐵使用の得失如何といふやうな點に於いて、何れも其說は正反對に出でて居る、其他種々の點に於いて、固癖録は正に水心子の說を駁撃せんが爲めに著述せられたものではあるまいかと惟しまるゝほどである。

元來、水心子が、劍工秘傳志を始め、刀劍實用論、刀劍辨疑などに述べて居る說を仔細に觀察すると、忠棟が攻撃し慨歎するやうな當時の新刀鍛冶一流の態度、様子、が、其中に窺はるのである、實際水心子の著述の上には、可成り複雑な心理作用が行はれて居ることを認めざるを得ないのである。

しかし、刀劍製作に關しては、水心子は、兎も角、多方面の問題を研究して居り、其間には敬服すべき卓見は數多あるのであるから、其刀劍界に貢獻した功績の大なることは、勿論のことである、しかし、右に

述ぶるやうな次第で、多少政略的の意味が交つてか、其著述上には、態度の曖昧な點、誇張的、自家辯護的の點などの多いことも覆ふべからざる事のやうに思はれる、前回の報告中にも記したが、彼の鈍句論の如き正しく其一例ではあるまいか。

鍛錬に就いても、彼れの説の中に、明かに前後矛盾と思はるゝ筋が発見せらるゝのである、水心子の刀劍鍛錬の理想は、卸鐵の法によつて、一鍛を加へざるにあることは、上來屢々述ぶるところによつて明かなことである、四五遍の鍛は普通を超えたもので、多くとも七八遍を限度と認めて居るのである、然るに、刀劍實用論後編に、折れざる爲めに鎌を眞に入候と申事は誠に手拔事と申ものにて、本法には御座なく候、本法は、忠の先迄よく鍛候鋼を用ゐて造り候を眞之作と申候云々、又刀劍辨疑下卷に、應永以後の作は影移り等の傳も漸々に絶えて移、亂影、二重刃或は稻妻などのある作も見えず、只數遍鍛へて造りたるもの多し、紫の如き潤はしき鐵色なるものなし、猶又慶長以後新刀と號する作に至つては、彌數遍鍛へて造りたるものばかりにて、古傳彌衰へ刃色黒く乾きたる鐵色多し云々など、稱して居る、更に劍工秘傳志上卷鍛錬の部に強過ぎる鋼でも三十遍以上五十遍も鍛へれば然るべき刃味の鐵と成る、自分の差料を五十遍鍛へて作つたところ、刃色白く、乾き心もなく、よい鐵性のものが出來上つたといふ、しかし、此方法は鋼も炭も澤山費へるばかりで、大した益もないのであるから、よい鐵を選んで、凡そ十四五遍から二十遍も鍛へたのが、一番良いのであるといひ、猶次の歌を附加へて居る。

強過る鐵も數々鍛ふれば程よき鐵に成る物と知れ  
強過ず柔過ぬ鐵ならば十四五遍に足るものと知れ

是等の例によつて、水心子の説を考へて見ると、鍛錬といふことが、刀劍製作には、どうしても、缺くことのできぬものであることは、水心子とても同感であるといふ事情を、不用意の中に物語つて居るやうに思はるゝので、元來劍工秘傳志の上卷に記述してある鍛錬の説明は、可成り詳密に亘つたもので

52  
初めから必要條件視されて居る性質のものであることは明に看取せらるゝのであつて、前きに掲げた水心子の理想論ともいふべき鍛錬の説に比較して見ると、其説に關する根本の態度に甚しい相違があり、彼れの鍛錬に對する旗幟が、甚だ明瞭を缺いてゐるやうに解せらるゝのである。

又松村英記の刀劔或問の説の中にも、彼が鍛錬の重要なことを暗々裡に認め、而かも、これを、強ひて打消さうとしてゐるのではあるまいかと思はるゝ點があるやうに思はれる。

前に掲げた刀劔或問の一節の中に、萬治寛文の頃に助廣、眞改のやうな名工が輩出して、古法の卸鐵の法によらず、數十鍛して鐵を精美にする造法を工夫し、一世を風靡する良刀を造ることとなつた、爾來天下の人が悉く、古刀の良いのは皆數十鍛して然らしめたものであると信ずるやうになり、隨つて精錬の法次第に廢れて、精鍛の法勃興することになつたのである云々といつてゐる。

又同書の他の條に、新刀鍛冶の良工が、數十鍛してよく造つたものは、地鐵の精美古刀に見紛るやうなものがあるけれども、古刀は鎔鍊(鎔鍊といふ意味は同著者の用ゆる精鍊といふことゝ同一意味で所謂卸鐵のことである)して鍛錬したのでない、新刀は鍛錬して鎔鍊したものでないので、精美とか麗潤とかいふ點に於いて、新刀は到底古刀に及ばぬのである、鍛錬して細美にしたのは、細美といふても羽二重の織目を無くすることの出來ないと一般である、之れに反し、古刀は鎔鍊して鍛錬したものでないから、精美自然であつて、いさゝかも透間がない、是れ鍛錬の鎔鍊に及ばぬ理由であるといふ。

以上の刀劔或問の説も解釋次第では、卸鐵の法を鼓吹したことにならずに、却つて鍛錬の力の大きなことを益々擴張せしむるやうな結果になりはせぬかと疑はるゝのである、刀劔或問に於いて、推賞して居る前記の鍛冶は、新刀鍛冶中でも後世屈指の中に數へらるゝ人々で、場合によつては古名工をも凌駕する程の名聲を有してゐることは、斯界の定評である、是等の人々が適々幾千の新刀鍛冶と類を異にし、數十鍛鍊を加へたものとする、刀劔固癖録の著者が、極力主張する、所謂古刀の上作は、鍛鍊

數十遍に及ぶが、之れに反し、慶長以來の新刀は次第に鍛錬粗略になり、僅かに數遍に過ぎざるものがある爲、良刀が出来ぬのであるといふ説の最も多く事實に接近してゐるのではあるまいかといふことを感得せざるを得ぬやうに思はれる、何んとなれば、助廣、真改等が當時新刀鍛冶の鍛錬を粗略にして良結果を得ざることを早くも悟つて、自分は衆に抽んで、斷然古への數鍛法を遵守し、かくて、あれだけの名聲を贏ち得るだけの良作を造り出し得たのであるとも解し得るからである、唯茲に疑問とすべきは、刀劍或問の著者が説く如く、助廣、真改等新刀の名工が果して數十鍛錬を加へたものであるか否やである、刀劍或問には助廣、真改等が數十鍛錬法を創始して成效し、それ以來、鍛錬の數を多くすることが、一般に流行するようになったのであると稱して居るけれども、助廣、真改等は姑く措いて、一般に新刀鍛冶が種々の新法を工夫し、鍛數を多く加へなかつたことが、實際の状態であつたことは疑ふべからざることのやうに認められるので、或問の説は實狀に背馳してゐるやうである。

「刀劍或問」の助廣、真改等が數十鍛法を創始したものであると説いてゐることを、自分は疑問であると述べたが、それは固癖録に於いて、著者忠棟は、助廣、真改等をも、一般新刀鍛冶と同一視して、卸鐵の法を行つたものとして居る、否寧ろ其法の元祖と認めてゐるのである、水心子も刀劍實用論後篇の中に「尤新刀にても助廣、真改などの作は卸鐵にても候哉、刃白も白く、潤はしく、古刀上作の鐵性に耻ざる處御座候云々」といつて助廣、真改等をもつて卸鐵の法に據つたものゝやうにも考へて居る、尤も水心子の此説は或は助廣、真改等を己れの味方に引入れん爲めの我田引水論であるかも知れぬ、要するに助廣、真改等が新刀鍛冶中の名人で、古名工をも凌ぐ技倆を有してゐたことは事實であるやうであるから、彼等が卸鐵の法に據つたか、數十鍛したものであるかは、固癖録並びに水心子の兩者の説の成敗に、多少の關係を有することであらうと信ずる、しかし、今これを確むることの出来ぬのを遺憾とする。

さて又刀劍或問に「新刀は鍛錬して、鎔鍊したものでないの、精美とか麗潤の點に於いて、新刀は古

刀に及ばぬ鍛錬の結果細美になつたのは、細美といふ中にも、羽二重の織目を無くすることの出来ぬと一般である、之れに反し、古刀は鎔錬して鍛錬せぬもの故、精美自然であつて、少しも透間がない」と稱して居るが、これは聊か遁辭に過ぎぬやうに見受られる、元來鑑定道に於いては、羽二重に織目ある如く、刀劔も地鐵に鍛目あらはれ、而かもそれが至極細美になつて居るやうなものを寧ろ賞美して居るのではあるまいか、刀劔實用論後篇に、鍛目の見えぬ水心子の作を目無鐵など、稱して笑ふ者があつたといふことを記してあるが、これは笑ふ者の鑑識が寧ろ高いのであるやうに考へらるゝ、實際古作の名刀で鍛目のないものは殆んどなく、但しそれが極めて精美であつて、凡眼には殆んど見分ち難きほどによく鍛錬したものが眞の上作たる價値を有するものであると認めてゐるのである。

最後に、水心子の卸鐵中心説と、刀劔固癖録の數十鍛錬中心説とは、孰れがより多くの味方を有するかを検するのに、水心子と同一意見を有するものは、前記松村英記の外には他に差し當つて見受られぬのであるが、卸鐵の法に反對意見を有するもの、換言すれば鍛錬説に直接間接多くの同感を有する説は、比較的、前者に比して多數である。

江戸幕府講武所奉行窪田清音の「撰刀記」に、

近世のをろしかねのきたへにては、地こまかにして、大方人の目にはうるほひあるように見ゆれども、よく見るときはかはさき心ありて、火過ぎたるは刃損じ、足らざるは曲り易く、よきほどなるも、つよく物にふるゝときは、曲りもし、又は刃のかけもして、この製よからず、たらはぬ目には花やぎたるになづみて、めづることなかれ、刃業も必悪し。

因みに、撰刀記の著者の窪田清音といふ人は、文武の達人で、劔道、槍術、馬術などいづれも奥義を極め、又和歌を橘千蔭に學んだといふ、夙に刀劔鍛錬の術を研究し、源清麿に指導を與へ、且つ自作の刀が、まゝ世に存するといふことである、其家僅かに二百俵の寄合に過ぎなかつたけれども、幕末の一俊傑で

あつたといふことが、羽臯隱史の「鑑刀集成」の例言の中に見えて居る（勿論清音と山浦正行則ち源清麿の師弟關係の事は清音の自著「鑑記餘論」に明かに記されて居る）又「刀劔五行論」の中にも卸鐵の缺點を擧げて居る。

おろしかねは自然に鐵性弱き故に、さらりとさえず、うつとりとして、雪の如くには成り難し、おろし鐵は一度鐵山の下ケに掛り、くずとなりたる品を今二度吹おろす故に、本性和りて、此故に地刃共に眞の底より澄みさえたる色には成り難し云々。

但し同書の他の條を見ると、當時用ゆる所の卸鐵を以て一度も鍛へず造れば、地鐵ざく／＼として古刀の如き刀になるものなれども、切味よろしからず、少くとも七八度より十四五度鍛へて、此金を刃に入れ用て良、二十一度より三十一度の鍛は地鐵弱く見ゆる、云々といつて、必ずしも卸鐵を排斥して居るのではなく、適當に鍛鍊を加へれば卸鐵でも差支ないものと認めて居るので、此點に於いては水心子と結局同一意見になるわけであるから、絶對的に卸鐵の法の反對説と見ることはできぬかも知れぬが、前の引用文などから推察すると、卸鐵の法が根本的に或る缺點を有することを自然に自覺してゐるやうである、猶刀劔五行論の著者は、古作は一鍛を加へざるものであるといふことを唱道するものがあるけれども、これは俗説に過ぎない、正宗などは地肌が多く、砂流、稻妻などもあり、地さらりとしてあらいので、一鍛もせぬやうに見ゆるけれども、實際はよく鍛へたものであると稱して居る。

又刀劔固癖録に、上古は鍛鍊六十四遍を通例とし、中古應永頃に至ると減じて三十二遍を通例とするやうになつた云々といつてゐることは、前きに記した通りであるが、刀劔五行論に永祿年中傳書なるものを引用し、當時の鍛鍊數三十一度迄云々といふこと掲げてある、永祿年中の傳書なるもの、今これを確むる由もないが、若しそれが事實であつたならば、その説は固癖録の所説と略ぼ一致することになるのである。

又最近のものでは、刀劔會誌第四十九號に角田庄平氏の「鍛法問答」といふ一文字がある、之れは水心子正秀の説を批評し併せて備前福岡一文字則宗鎌倉正宗並びに其一門の義弘、貞宗、左文字及び則重等の鍛法なるものを紹介せられたものである、角田氏は是等古名工の鍛法を如何にして知得せられたのであるか、其由來を明にせられてないので、これが採擇に多少の惑なきを得ぬのであるが、必ずや何等かの確實なる典據に基いて、記述せられたものと信ずるを以て更にこれを茲に紹介して、參考に供したいと思ふ。さて則宗の鍛法なるものを見るに、卸鐵、則宗の卸鐵といふのは、山にある邪氣のない粘力の強い砂鐵を集め、水で幾回も曝した後、水底に残つた鋭いものを、山(たゝら)に掛けて銑として職場に引取り、更にこれを居宅のたゝらにかけて、鎔解したものであるといふ。一般に卸鐵といへば、上古も中古も近世も、同じ製法で、同じ性質を有するものゝやうに解せらるゝけれども、是等の點は充分に研究の餘地あることとて、近世も上古も卸鐵に變りはなしとして、一律に取扱ふことは到底、不可能のこととであらうと思ふ、例へば鍋鐵、庖丁鐵、銑、鋼など種々雑多の鐵を卸し用ゆる近世の卸鐵と、上古直接鐵山より精選採取した純粹の砂鐵を卸したものと、其間非常に性質を異にして居ることとであらうと思ふ、或は全然別種の性質を帯びたものであるかも知れぬ、近世の卸鐵は數多の鍛鍊を加へることを許されぬことは諸書の説くところと推察し得るのであるが、上古のは或は鍛鍊をいかに加へても、其力衰へず、寧ろ益々其威力を増す性質を有して居つたかも知れぬ、さすれば、上古の卸鐵と近世の卸鐵とでは全く反對の性質を有するものと見なければならぬ、面金の部先き三尺あるものを刀一本の原料に見積つて切分け、第一に貳つ折二十回鍛へ、第二に角にして十文字を三十回鍛へ、第三に短冊のやうにして堅に折り、是を三十回程鍛へ、都合八十回鍛へて、漸く面金の鍛鍊を終るのである、又心金は三十五回から四十回ばかり鍛へるのである、尤も面金の剛いときは八十回の外、更に鍛鍊十數回に上る時があるといふ、又相州正宗以上一門の鍛へも、結局百十餘回を越え而かも、更に又色紙のやうに延

べこれを丸く巻いて、平になるやうに鍛へること凡そ十回餘り、是を束と稱して、刀の折れの防ぎとするといふことである、又此堅筋幾つとなく現はれるので、人は是を板目と稱するのであると、猶世間では正宗の鍛へを七八回折りと思つて居るから、其作刀を見るに當つて、最初は其地鐵荒く見ゆるのであるが、仔細に觀察するに及んで、前記のやうな鍛への精緻なことを知るに至るのであるといふ、心金は別に薄紫色の鐵五十回程鍛へて入れるのである、是れて全く鍛へを終るのであるといふ。

角田氏は、水心子をもつて、古法鎌倉風の精鍊法を知つて、刃こぼれを防ぐの用意に缺けて居ると評してゐる、其結果地鐵を充分力ある限り鍛へることができず、自然鍛へ數を略するので大出來物を焼く時は胴折れ刃こぼれを生ずるやうになるのであるといつて、彼の極力嫌惡する大出來物の不可ならざる理由を述べられて居る。

以上に於いて、大體卸鐵説と鍛鍊説の得失に就いて、水心子及び固癖録の著者忠棟以外の人々の説を紹介したのであるが、いづれも鍛鍊の必要を認めぬものは皆無のやうである、右の角田氏も、近世の刀工が鍛鍊に重きを置かぬ傾向があるけれども、鍛の大切なことは敢へて論を要せざるところであると説かれて居る、但し卸鐵の法が古への良法でないといふことは斷言し難いことで、近世の方法とは餘程趣の異つた、數多度鍛鍊を加へても、鐵性の弱らぬ方法が行はれ居つたかも知れぬ、しかし、近世の所謂卸鐵の法は、少くとも、種々の缺點を有して居つて、刀劍製作には有力な方法でなかつたことは、諸家の説に徴して認めざるを得ぬやうに思はれる、たとへ、右の如く、古へに、優良な卸鐵の法が存在してゐたにしても、結局鍛鍊を重要條件とせぬ説には、吾人は、どうしても、疑惑を挾まざるを得ぬやうに信ぜらるゝ、日本刀から鍛鍊を抜き去つたならば、それは恰も魂のない人間と同様であらう、鍛鍊は、少くとも、從來の日本刀に取つては、唯一の特徴であつて、缺くべからざる要素であると信ずる、而して、此二者が密接の關係を有してゐることは、寧ろ常識的に自明なことであり、といふても過言ではなから

うと思ふ今日鍛錬といふ詞が、いろ／＼の意味に用ゐられてゐるが、蓋し其起源は、刀劍の鍛錬に淵源してゐることゝ考へらる。

刀劍固癖録の著者の忠棟は、右の如く鍛錬説を熱心に唱導してゐるが、單に數十鍛錬を施すことのみを以て、製作の能事畢れりとする意味ではなからう、數多たび鍛錬を加へるといふことは、要するに刀劍製作の基礎的條件に過ぎぬのであつて、謂はゞ、刀劍製作に當つて、何人も踏まなければならぬ正道を指示したものである、然るに、近世の鍛冶は、此一見平凡で而かも單純であるところの事柄にさへ其用意に缺けてゐて、種々の奇道に迷ふて居るのであるから、これを指摘し、警しむるのであるといふ意味であらうと想像せらるゝのである、而して時弊に對して感と同じうしたものは、必ずしも、固癖録の著者一人のみではない、前きに掲げた「撰刀記」の著者幕府講武所奉行の窪田清音も、固癖録の著者と同様の意見を「鍛記餘論」といふ書物の中に述べてゐる、詳細の事は原本に譲つて唯その梗概だけを次に記して見ると。

すべて物事の堂奥に達することは、容易の事でないから、古しへの鍛冶でも名人上手といはれたものは極めて稀れである、しかし、古しへの鍛冶は、いづれも最善を盡してよく作ることを旨としたので、概して眞面目な作が多い、これは表より時世の影響で、刀劍を作らする人、作る者、いづれも、近代人とは其精神が全く相違して居る、近代の人は泰平の餘波で、武士の心まで昔と相違し、刀劍を單に賞觀の具とするやうになつて、出來の花やかな點や、地刃の紋様などに心を奪はれて、地鐵の善惡といふことに深く注意を拂はず、専ら古作のみを尊重して、自身に適した刀劍を新に鍛はしむるといふやうな心掛の人が甚だ寡くなつてしまつた、そこで、又鍛冶も其時好に投ずる爲めに、ひたすら古作に似することに腐心し、よく模作し得れば、これを以て、非常の功名の如くに心得る事が滔々風をなすに至つたので、自然贋物を作つて、人を欺くことが愈々盛んとなつて來たのであるといふ、清音は其當時に於いて惡

しい贗物を作らぬものは、源正行(清磨)一人であらうとまで極言してゐる。又、新刀が到底古刀に及ばぬのは、一面刀劔の材料となるべき鐵が既に近世のものが古しへに劣れるからであるといふ、則ち鐵山の製法の粗製となつたことを詳述してゐる。適々、優良の鐵を製するものがあつても殆んど之を需要する人がない、却て當時の鋸工や鉸工などが比較的、良質のものを求むるやうな奇現象を呈する有様であるといふ。當時又銑卸しを用ゆる刀工が非常に多いけれども、此銑卸しの鐵は種々の缺點のあることを述べ、斯様な淺ましい僻事をして、どうして、名劔を作ることができやうかといふてゐる。猶、又、はがね、銑鐵、なまがねなど、取り交ぜ、卸して作ることも、盛んに行はれてゐるが、これらは、皆、來とか備前とか相州などの古刀を似せ作る手段である。又、鋼鐵、鍛黃金、鍛などいふのも、肌を見はさん爲めの手段であつて、決して良刀を造る所以の方法ではないと稱してゐる。猶、當時の贗作や種々の誤れる方法の數々を列擧し、而して、是等の事は、徒らに、當時の鍛冶を罵詈するの意ではない、自分の述べたことは、一つとして偽はりでなく、今の鍛冶のする事業を有のまゝに記したもので、聊か、刀劔を選択するものゝ爲めの、老婆心であるといふ。

要するに、近世の鍛冶の危道に迷つてゐることを指摘せる點に於いては、固癖録の著者と感を同じうせるものと謂うべきであらう。固癖録の著者忠棟なる人は、斯道に於いて、如何なる程度にまで其權威を認められるべきであるかは、全く不明であるが、其説くところの意見は、極めて質實穩健であつて、正に服膺すべき價值あるものであらうと信ずる。

さて、又、近藤守重の著「劔文考」内閣文庫所藏本といふ書に、支那でも、古くから刀劔鍛鍊に際し、折り返へし鍛へたことを、文選などの文句を引用して、考證を加へて居る。今是等の考證は省略するが、守重の意見に依ると、支那でも、上古から三國の頃までは、刀劔製作の技術が盛んで、幾多の名刀寶劔が現はれたことは、其中の著るしきものが、刀劔録、名劔記、龍乘諸書に記載せられてゐることによつて察知せら

60  
る、随つて其刀身上に見はれた肌や、文彩を形容した雅名が、其當時の經史子類の中に枚擧に違ない程に散見してゐる。龜文、漫理、縦理、亂理、蟠鋼、松文、梅花鋼、馬牙鋼、蓮花鏢、芙蓉、龍藻、青萍、采虹、簾紋、泮文などいふ、刀劍の肌模様を形容した文字は、必ずや當時の鑒定上の約束を示した言葉であらうといふ。守重は我邦の鍛法は、やはり支那の影響を受けたもので、恐らくは吳越秦漢より傳來したものであるまいかといふことを述べて居る。支那で劍を説くこと、鍊漏聞くに足らぬやうになつたのは、三國以降の事であつて、随つて、爾後、其鍛法なども傳を失ふに至つたものであらうといふ。我が邦の鍛法が秦漢吳越から傳來したものであるか否やは、これは、考古學上にも重大な問題であつて、吾々は、これに對して何等の智識を有して居らぬが、我國の古墳などより出づる所の直刀に、柰目肌顯はれ、燒刃なども種々の文彩を施してあつて、(報告第十參照)右劍文考に説くところの、支那三國以前の刀劍鍛法と、殆んど差異なき方法に據つたもののやうに考へらるゝのであるから、守重の説く如く、我邦の鍛法が、古く支那の右の國々から傳來したものであらうと疑ふのも一面の事實に相違なからうかとも思はれる。

要するに、上來、段々述ぶる通り、日本刀と鍛鍊とは、上古より密接不離の關係にあることは、疑を容るゝ餘地はないやうに信ぜらるゝので、鍛鍊を中心生命とする日本刀製作の各種の方法の變化沿革を云々する説はこれを承認し得るが、これを、第二義にも第三義にも輕視するところの説は、事實の真相に觸れたものではなからうと考へられる。

## (六)

以上は、主として、水心子及び刀劍固癖錄の著者源忠棟兩人の説を中心として、刀劍鍛法のことを述べたのであるが、猶他に此製作上の根本問題を論じたものに、刀劍得失考、劍刀秘寶、古今鍛冶備考、新刀辨疑、鍛冶精要などいふ書物のあることは、報告第八の中に紹介して置いた。その節、該書の内容に就いても概略説明した積りであるから、茲に、一々、これを、繰り返へす必要もなからうと思ふ。たゞ其時云ひ

残した點もあるのでそれを補足することとする。

新刀辨疑は有名な鎌田魚妙の撰述するところのものであつて、専ら新刀の位列とか中心軌範などを論じた所謂鑑刀書に屬するものであるが、第一卷、或問の中には魚妙が鍛冶の保則なる者をして鍛はしめたといふ鍛鍊法を掲げてゐる、第一備<sup>フナヘ</sup>、第二挫<sup>ヘシ</sup>、第三鍛、第四東<sup>タズネ</sup>、第五上鑠<sup>アツワカン</sup>、第六伸鑠<sup>ノベワカン</sup>、第七水折、第八銑<sup>ゼン</sup>、第九刃土、第十刃渡、第十一中心、第十二銘切など一々項目を分つて詳細説明を加へたものである。

又此の魚妙の十二ヶ條に對應して、古傳鍛鍊法と唱ふる方法を掲げて、彼此其得失を論じてゐるのが刀劔得失考である、此二者は前掲の水心子、固癖録の著者のやうな概念的の意見を述べたものでなく、刀劔の方法を明細に論じたものであり、且つ他に是等と比較すべき説も見受けられぬので、兩者の説の是非を判断することは困難であるが、たゞ、試みに、其中の二三を紹介して見ると、新刀辨疑、第二挫の説「鐵を一塊く焼いて打ひらめ水に入れて、大なるは三つ四つに破也、是を挫とも水折ともいふ」と云説に對して、刀劔得失考は「鐵の善惡製不製の吟味は爰にあり、一塊く焼いて水に入るゝ時は、水火尅して、刃を焼と同じ、然ば、鐵を弱ます道理にて、如此しては、焼直し同事世に云炮物よりも悪しきわけなり、山出しのまゝ、鍊ざる鐵性を水火烈敷尅しては、殊外疲勞する物故に誠精精製の意歎する時は水へ入るゝ事なし」といふやうな批難を加へて居る、新刀辨疑の挫の説は、得失考の著者の最も嫌忌する所の者であることは、得失考の序文中に、慶長以後の新刀が應永頃に出來た廢殘の古刀にも及ばぬのは近世の鍛冶の技術の優劣によるのではなく、全く水挫鍛と間<sup>アイ</sup>を取過ぐる爲めであると稱してゐるのに徴して明である、得失考の著名は此水挫法が慶長中埋忠明壽に創まり、爾來、國廣、眞改、助廣等其方法を踏襲して寛政文化の頃には愈々其方法が流行して來たのであるといふ、此の水挫法が近世の方法で、卸鐵と同様幾多の批難を受くるものであることは、折々他書にも散見してゐるのによつて知らるゝことである、此方法は近世鐵山に於いて直接製造する水入鋼又は四方白など稱する鋼の如きも

のを鍛冶自身で行ふ所の方法なのであらう、又辨疑の第三、第四、第五、第六などの説明の中に鐵を鑠かすといふことが屢々繰返へし用ゐられてゐる、是れも亦所謂卸鐵からヒントを得た一種特別の方法ではなからうかと想像せらるゝ、それで、此方法も得失考では良法とは認めて居らぬやうである、それは辨疑の第四束の條を批評してゐる言葉の中に、惣じて鑠と云ふは火を強く橐籥を遣ひ鐵を假令ば陽の如くにする故くわたくしと沸上になる、鍛と云ふは鐵に槌當る位にあかめ槌にて打しむる故鑠とは異り鐵弱らざるなり云々とあるによつて容易に察知し得ることであらう、これは一面卸鐵法と折返し鍛法との得失論のやうにも解釋せらるゝことと思はれる、猶前回報告の際には書名だけ知れてゐて實物に接する機會のなかつたもので、刀劍五行論といふのが、此書の著者は南海太郎朝尊といふ人で、新刀劍冶として、其作刀は上手ではないさうであるが、多少世間で認められて居るやうである、本書は第一に五行の性と刀劍との關係を説き、次ぎには諸國産の鋼鐵の性質を始めとして、刀劍の地肌、刃味、鍛鍊、焼刃など刀劍に關する總べての問題を五色の變化に應じて論じて居る、これが刀劍五行論なる表題の由つて來る所以なのであらう、可成り抽象的の議論が多いけれども、其中に砂鐵の吹分の方法、其他焼刃渡の事、武用の事、研の事など大體造刀に關する實地の問題を網羅してある鍛鍊に就いての説は、前文に二三引用して置いた、此鍛冶は黄金鍛、銅鐵鍛、其他異種の金屬を鋼中に鍛入ることと可能であるとして居、且つ、これによつて、金筋、銀筋、稻妻、砂流、地鏽、梨子肌など面白い肌模様などが現はれるものとして居る、此點は水心子と同意見である、隨つて、固癖録とは意見相反して居るのである。

さて、鍛鍊に關する此鍛冶の理想なるものを忖度して見ると、蓋し、束鍛であるやうに思はれる、武用之事といふ條に、彼が相州行光、備前長光の二刀を打折つて其鍛へ方を検査したことを述べてゐる、即ち右の二刀を金床の角に當てゝ、刃棟、平から三十打程打つて漸くねぢ切るやうにして打折つたとこ

る其折には數百の絲を束ねたやうに見える、又折れ口に種々の色替りがあるによつて、其金數の無數であることが認められたといふ、彼れはこれを稱して、東鍛であると説明して居る、備前景光の刀も前と同様試験して見たところ、刃金、心金、棟金、兩平等色替りの金五種類あつて、又不折事を第一とした武用に適つた鍛であるといふ、是等の説明から推察すると、彼れが東鍛なるものを理想としてゐることが明かに看取せらるゝやうに思はるのである。

最後に、前回の報告の際に、全く存在を知らなかつたものに「鍛記餘論」といふのがあつた、これは、幕府講武所奉行窪田清音の著であつて、著者が最も斯道に精通して居り且つ其人物が特に信用するに足るべき人であることは前に述べた通りである、本書の主意が固癖録をよく類似して居ることも、前述の通りである、近世鐵山の衰廢した事、近世の鍛鍊法の墮落頽廢したことを諄々と説いてゐる、殊に諸種の贗作曲事の方法の數々を摘發せる點は注目の價値があらうと思ふ、そうして、其中には今日では當然の事として行はれてゐるものも見受けられるのである、詳細のことは原書に譲ることゝするが、要するに本書は鍛鍊書としても亦鑑刀書としても、大いに參考すべき意見に富んで居ると、信ずる。(完)

## 滿洲鞍山附近に於て發掘せる古代の鐵具類

(東京帝國大學工學部日本刀研究室報告第十五)

倭 國 一

數年前滿洲鞍山店附近にて新に鐵鑛を發見せり其の存立せる區域も擴大にして其鑛量も頗る豊富なるを以て南滿洲鐵道會社に於ては遼陽の南なる立山、鞍山店の兩驛の中間に一大製鐵所を新設せり、鐵鑛は八鑛區に分れて點々散布存在するも爾來鐵鑛を採鑛し又は採掘する個所は其内に於て東西の兩鞍山、大孤山、櫻桃園、王家堡子の五個所とす、其工程を進捗するに従ふて往古既に此等鐵鑛を